

あなたはどうか考える？食料と環境に関する鬼ムズ！？中学受験風論述問題 ～令和3年度こども霞ヶ関見学デー～

問2：「自然が負担しているコスト」について考えてみよう！

企業が事業活動をするためには、「人」、「もの（原材料を^{ふく}む）」、「お金」などの他に、きれいな水や土地や空気など、自然のめぐみが必要です。これを「自然資本」と言います。例えば、コンビニのおにぎりであれば、原材料であるコメを作るための農業だけでなく、加工するための工場を操業するためにもきれいな水や土地や空気が必要ですが、それらは自然から得られるものです。

企業は事業活動により自然資本を活用して利益を得ている一方で、環境に^{はいりよ}配慮せずに事業活動することにより、利益のもととなる自然資本そのものを^{はかい}破壊してしまうことがあります。なぜならば、環境に配慮しながら製品を作ることや、利用した自然資本を回復させながら事業活動を行うことは、企業にとって手間とお金がかかるためです。さらに、その自然資本を回復させる手間とお金は、消費者が手にとった時にわかる「品質」そのものには反映されないことから、商品の価格に入れ^こ込むことが難しいのです。これらが、企業の事業活動に利用された自然資本、すなわち「自然が負担しているコスト」が無視されることにつながり、生態系破壊や生物多様性の損失の原因の一つとなっています。

事業活動による生態系破壊は、日本国内だけのものだけではありません。スーパーでは多くの国内産の野菜を目にすることが多いですが、野菜ジュースの野菜はどうでしょうか。国産の肉を作るために使われた、牛や豚や^{にわとり}鶏のえさはどうでしょうか。おやつに使われている小麦粉はどうでしょうか。日本は世界有数の食料輸入国であり、私たちの食べ物を確保するために、日本から遠く離れた地域の自然にコストを負担させていることもあります。

例えば、日本国内で生産されるエビの量は、2020年の実績で約1万6千トン（天然エビ約1万4千トン・養殖エビ約2千トン）です。対して海外から輸入されるエビは2018年に約16万トンと、国内生産量の10倍を超え、私たちが食べているエビは、ほとんど輸入に^{たよ}頼っているといえます。輸入されているエビの多くは、東南アジアの中の「マングローブ林」がある地域で作られています。「マングローブ」とは、木の名前ではなく、「熱帯や亜熱帯地域の、潮の満ち引きで水位が変わる、海水と淡水がまざる^{きすいいき}汽水域に形成される植物のあつまり」のことです。マングローブが作り出す、水と土の中の、動物、植物、微生物と、汽水域が作る^{ぜつみょう}絶妙なバランスで保たれている生態系は、ここでしか成立しない特有のものであり、生物多様性の宝庫とも呼べる貴重な生態系といえます。

しかしながら、この半世紀でマングローブ林は激減してしまいました。その最大の要因は、エビ養殖池への転換であると言われています。タイではここ 20～30 年の間にももとの半分近い面積のマングローブ林がエビの養殖池になりました。インドネシアやベトナムでも、かつてマングローブ林だった場所がエビの養殖池になっています。養殖池で生産されたエビは世界中へ輸出されていますが、このエビを多く消費している国の一つが日本なのです。

マングローブが減少した理由は、養殖だけではなく、ほかにも炭を得るための伐採^{ばっさい}や、農用地への転換などがありますが、どの理由も私たちの食料の消費と無関係ではありません。現在の世代が自然資本を破壊して利益を得ることで、生物多様性の損失が引き起こされ、それらは次世代への負債^{ふきい}となり蓄積され続けていきます。

実は近年、そのような「自然が負担しているコスト」のことを考えて、自然を守りながら作られた商品を販売し、その活動を商品に表示する企業が増えてきています。

「自然が負担しているコスト」が少なくなるよう生産された水産物を表す認証ラベルとして、水産エコラベルがあります。水産資源や生態系などに配慮し、環境にやさしい方法で生産されていると認められた水産物を、消費者が選んで購入できるように商品にラベルを表示する仕組みです。MEL 認証、MSC 認証、ASC 認証などの種類があります。その中でも、持続可能な養殖で育てられたエビに付けられる ASC 認証は、2011 年に FAO (国連食糧農業機関) の水産委員会で策定されたガイドラインに基づいて作られました。科学的な情報を踏まえて、計画的な漁場環境の維持・改善を行うことにより、生態系の保全に配慮した養殖業によって生産されたものであることを示しています。

このように、商品に認証マークが付いていることで、ほかのものと比較したときに、その商品に使われている原材料が環境に配慮して作られたものであるということを、私たち消費者は見て取ることができるのです。上記に挙げた魚介類の他にも、コーヒー豆や、野菜、木材など、様々な商品に対する環境認証があります。また、環境に配慮されて作られた商品は、認証マークの付いたもの以外にもたくさんあります。

認証を取る時には、認証の基準を達成していることを証明するために多くの手間やお金がかかりますし、本来は、認証というものがなくても、皆が自然資本を守りながら企業活動を行うことが理想ではありますが、環境に配慮されて作られた食品や製品は、私たちが自然資本を次世代に引き継いでいくために、毎日の生活の中で意識すべき大切な考え方を示してくれています。

問 2－1

「自然が負担しているコスト」が製品の価格に適切に反映されていないことで発生する問題を挙げ、その解決方法としてどんなものが考えられるかについて説明してください。

問 2－2

企業活動において「自然が負担しているコスト」を誰がどう負担すべきかについて、3 人の大人が話しています。あなたは A さん、B さん、C さんのどの考え方に近いですか。それとも 3 人のいずれとも違いますか。理由を添えて説明しましょう。

A さん：製造過程で企業が自然資本を守り、それにかかったコストを価格に上乗せすることで、製品を購入する消費者が負担すべき。自然資本を守るために、製品の値段が上がるのは仕方がないことである。

B さん：A さんの考え方では、環境に配慮していない会社の製品の方が売れてしまうのではないか。自然資本にかかる費用を消費者に負担させる方法では製品が売れず、環境に配慮した取組が広がらないので、同じ値段で手に入るようにした方が良い。企業が自然資本を守るためににかかったコストは 国民から徴収^{ちやうしゆう}する税金でまかなうべき。

C さん：A さんの考え方では、どんなに一つの企業が頑張っているとしても、同じ値段で環境に配慮したものが提供されるなら、その価値は消費者に理解されない。また、B さんの考え方については、民主主義である以上、国民が納得できない内容で税金を課すことは避^さけるべきだと思う。しかしながら、環境に配慮されない自然資本へのダメージは次世代への負債となってしまうので対策が必要である。そのため製造過程での環境破壊を法律で禁止し、違反^{いはん}した場合は罰金^{ばつぎん}を科してはどうか。

☆問 2－1 を考えるためのヒント

「自然が負担しているコスト」が製品の価格に適切に反映されていない」ということは、誰がそのコストを負担することになるのでしょうか。またその場合、自然資本、製品を作る企業、消費者には、それぞれどんな影響があるのでしょうか。

☆問 2－2 を考えるためのヒント

A さん, B さん, C さんそれぞれの考え方について、本当にその方法で自然資本が持続的に守られるのかどうか、公平かどうかなど、いくつかの視点でいい点と悪い点を考えて比較してみましょう。例えば、C さんの意見の悪い点を考えてみましょう。日本の食料はおよそ 6 割を輸入でまかなっている状況を踏まえると、C さんの意見のように日本の法律だけで環境破壊を禁止したとしても、あまり効果がないかもしれませんよね。